令和３年度
鹿児島大学
FD報告書

鹿児島大学FD委員会
KAGOSHIMA UNIVERSITY Faculty Development

令和３年度　鹿児島大学FD報告書

CONTENTS

Ⅰ. 令和３年度FD報告書作成にあたって

■ 鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事・副学長） …… 2

Ⅱ. 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針 3

Ⅲ. 令和３年度FD活動一覧 …… 4

Ⅳ. 鹿児島大学のFD活動

第1部 全学的取組 …… 5

■ FD連続セミナー …… 6

■ FD・SD合同フォーラム …… 9

■ 若手教員研修会 …… 13

■ 鹿大版FDガイド第24・25号の発刊にあたって …… 18

■ 2021年度大学IRコンソーシアムアンケート …… 20

■ 令和２年度鹿児島大学ベストティーチャー賞 …… 22

第2部 各学部・研究科のFD活動報告 …… 23

■ 共通教育センター

■ 法文学部、人文社会科学研究科

■ 教育学部、教育学研究科

■ 理学部

■ 医学部医学科

■ 医学部保健学科、保健学研究科

■ 歯学部

■ 工学部

■ 農学部、農林水産学研究科

■ 水産学部

■ 共同獣医学部、共同獣医学研究科

■ 理工学研究科

■ 医歯学総合研究科

■ 臨床心理学研究科

■ 連合農学研究科

I 令和３年度FD（ファカルティ・ディベロップメント）報告書作成にあたって

鹿児島大学FD委員会委員長（教育担当理事・副学長）
武隈　晃

ＦＤ活動は高等教育機関における教育改善の有用な道具であるとともに、アカデミアを中長期に展望するプラットフォームとしても機能しうるものと考えられます。鹿児島大学のホームページにある「鹿児島大学のFD活動」には平成22年度以降のFD活動の詳細が報告されています（https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/fd.htm）。ご高覧頂くことをお勧めします。報告書を通読すると、本学におけるFDの取組の成果と課題を時系列に知ることができます。

FD委員会のミッションは、本学が掲げる教育理念･目標を達成するための教員の教授法・指導法の開発、授業力向上の取組み、学習効果をあげるための学生支援などに寄与することです。昨今ではさらに、各学部のカリキュラム・プログラム再構築への提言や、いわゆる「学位の質保証」を企図した学修環境の整備についての取り組みに直接・間接に貢献することが求められています。

大学教育の使命には諸相ありますが、これらのうち高等教育機関としての教育の内部質保証やそれを担保するPDCAサイクルの展開という側面に着目すれば、FD活動は、その基底を成すものと位置づけることができます。平成26年に本学教育研究評議会が決定した「鹿児島大学のファカルティ・ディベロップメントに関する指針」において、大学の責務として「全学のFD活動の内容や方法を点検・評価し、その結果を踏まえ、適宜、各部局の環境整備および各教員へのFDへの取組に対して支援を行う。」部局等の責務として「カリキュラムが教育目標やアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーと整合しているかどうかを点検・評価して、必要に応じて、カリキュラムの開発・改善に努め、教育の質の向上を図る。」教員の責務として「授業の目標やシラバスの検討を随時行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価およびカリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることに努める。」を掲げています。

こうしたガイドラインに従い、令和３年度は、次の事業を継続的に実施しました。

- FD連続セミナー～学生の声から学ぶ～（全6回）
- FD・SD合同フォーラム「全員で考えるコロナ禍を経験した未来の大学」
- 若手教員研修会「「学習者中心の学習環境デザインを考える」
- FDガイド第24・25号の発行
- 大学IRコンソーシアムの学生調査（１年生調査、上級生調査）
- 遠隔授業に関する学生アンケート（全学生）
- 卒業予定者アンケート

令和３年度も「全専任教員の75％以上がＦＤ活動に参加する」という目標数値を達成しました。引き続き、学部等の教職員の皆さん、総合教育機構の教職員の皆さん、そして学生の皆さんのご協力と協働により、全学をあげてＦＤ活動に取り組む所存です。諸賢のご理解と本報告書へのご批正を賜りたく存じています。

II 鹿児島大学ファカルティ・ディベロップメントに関する指針

平成26年7月17日
教育研究評議会決定

鹿児島大学(以下「本学」という。)は、鹿児島大学学則(平成16年規則第86号)第２条において、鹿児島大学憲章の下に、広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、もって学術文化の向上に寄与するとともに自主自律と進取の精神を持った有為な人材を育成することを目的とすると定めている。本学は、この教育研究上の目的に根ざした人間を育成することができるように、質の高い教育を実施する責務を負っている。そのためには、大学として、教育の内容や方法の開発・改善を組織的かつ継続的に行い、より実質的なものへとしていく必要がある。

[目的]

第１　この指針は、本学におけるファカルティ・ディベロップメント(以下「FD」という。)を推進していくために必要な事項を定め、教育の内容や方法の開発・改善及び教育研究に関する研修についての責務を明記することで、教育の質の向上及び学生支援の円滑な遂行を図ることを目的とする。

[定義]

第２　この指針において、FDとは、大学、部局等、そして教員が、本学の教育理念を実現するために、カリキュラム及び授業の内容や方法を開発・改善することにより、教育の質の向上を図るとともに、学生支援を行う自発的な取組を指す。

２　この指針において、「部局等」とは、学部、研究科及びセンター等、FD活動において組織的な取組を実施する主体を指す。

３　この指針において、「教員」とは、本学の常勤及び非常勤の教員を指す。

[大学の責務]

第３　本学は、その教育理念や教育目標を実現するために、全学のFD活動の内容や方法を点検・評価し、その結果を踏まえ、適宜、各部局の環境整備及び各教員のFDへの取組に対して支援を行う。

[部局等の責務]

第４　部局等は、学部・学科等のカリキュラムが教育目標やアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びディプロマ・ポリシーと整合しているかどうかを点検・評価し、必要に応じて、カリキュラムの開発・改善に努め、教育の質の向上を図る。

[教員の責務]

第５　本学の教員は、自らが担当している授業の目標やシラバスの検討を随時行い、学生理解・支援、授業内容、授業方法、教育評価及びカリキュラム開発・改善に関する知識・技能を高めることに努める。

令和３年度　FD活動一覧

イベント等

10～11月	FD連続セミナー～学生の声から学ぶ～（全6回）
10～12月	大学IRコンソーシアムアンケート実施（10/19～12/25）
12月	第１回FD･SD合同フォーラム「全員で考えるコロナ禍を経験した未来の大学」 （大学地域コンソーシアム鹿児島FD･SD活動事業部会と共催）（12/10）
2月	若手教員研修会「学習者中心の学習環境デザインを考える」(2/18)

刊行物

鹿大FD報告書（令和２年度）の作成

鹿児島大学FDガイド第24号の発行

鹿児島大学FDガイド第25号の発行

令和３年度　FD委員会委員名簿

所　属　等	氏　名
理事（教育担当）	武隈　晃
高等教育研究開発センター長	伊藤　奈賀子
高等教育研究開発センター	森　裕生
共通教育センター	今井　裕
法文学部･人文社会科学研究科	酒井　佑輔
教育学部･教育学研究科	前田　晶子
理学部	内海　俊樹
医学部･保健学研究科	宮田　昌明
歯学部	菊地　聖史
工学部･理工学研究科	川畑　秋馬
農学部･農林水産学研究科･連合農学研究科	藤田　清貴
水産学部	土井　航
共同獣医学部･共同獣医学研究科	乙丸　孝之介
医歯学総合研究科	田川 まさみ
臨床心理学研究科	久保　陽子

Ⅲ 鹿児島大学のFD活動

第1部

全学的取組

FD連続セミナー ～学生の声から学ぶ～ （全6回）

1. 企画の目的

- 学生の「生の声」を聞き、今後の教育改善のヒントを得る。
- 特に「遠隔授業に関するアンケート」ではでは十分自把握できない話を伺いながら、これからの鹿児島大学や授業・学生支援のあり方などを学生・職員・教員全員で検討する

2. 実施日程

開催回	日程	テーマ	登壇者
1	10月21日(木) 16:10～17:10	入学前の1年間がコロナ禍だった学生が 鹿児島大学に来て	嘉村　侑香　(法文学部･1年) 榎元　愛花梨(工学部･1年) 山中　雪嘉　(工学部･1年)
2	11月4日(木) 13:00～14:00	コロナ禍の留学･国際交流関係	米倉　はるか(法文学部･4年) 中村　太一　(農学部･3年)
3	11月10日(水) 13:00～14:00	コロナ禍のインターンシップ･実習	鮫島　卯美　(医学部保健学科･４年) 小山　愛斗　(法文学部･3年) 谷川　琳音　(水産学部･3年)
4	11月17日(水) 11:00～12:00	大学院生の研究活動	阪上　正英　(農林水産学研究科) 村瀬　建　(理工学研究科)
5	11月22日(月) 16:10～17:10	就職活動を終えて	米倉　はるか(法文学部･4年) 堤　崇晃　(法文学部･4年)
6	11月29日(月) 14:30～15:30	1年次をほぼ遠隔授業で過ごした学生が 2年生になって	加藤　銀次　(理学部･2年) 仲塚　愛莉　(法文学部･2年)

（敬称略）

3. 実施方法

- Zoomによるリアルタイム配信、その後オンデマンド配信

4. 参加人数

開催回	リアルタイム配信	オンデマンド配信	合計(人)
1	21	9	30
2	23	7	30
3	19	11	30
4	14		14
5	18	11	29
6	26	16	42

5. 実施報告

本本企画は、前年度に引き続き２年目の開催となった。前年度は、遠隔授業アンケートにおいて「良かった授業とその理由」に挙がった教員から、特に高い評価を得ていた教員10名が講演を行った。そこでは教員としていかに遠隔授業に取り組んだり、工夫したりしたのかについて情報提供を行った。

コロナ禍の遠隔授業では教員の苦労も当然多かった。一方で、それ以上に学生の苦労やストレス、悩みも多かっただろう。この点に着目し、2021年度のFD連続セミナーでは、学生が登壇し、それぞれの立場でどのように遠隔授業やコロナ禍の活動を行ったのか情報提供を行う形式とした。

登壇した学生とテーマは「２．実施日程」に示すとおりである。１年生から大学院生まで、幅広い層、活動に携わってきた学生の協力を得た。また、登壇者が学生であることを踏まえ、認知的負荷を減らすためインタビュー形式で「活動」や「思い」を語ってもらった。インタビュアーは社会学の研究者であり、インタビュー調査の経験が豊富な日髙優介先生（高等教育研究開発センター）が務めた。

コロナ禍で学生の様々な活動に影響が及んだことは、多くの方が知る通りである。学習面だけでなく生活面までの学生生活そのものもが大きく変わった。一方で、本セミナーではコロナ禍だからこそ取り組んだことや、視点を変えて新たな活動を始めたことなども語られた。また、それらを踏まえた大学への要望や後輩へのメッセージも語られた。

これより本報告書では、（1）コロナ禍での工夫・新たな活動、（2）コロナ禍の不安といかに向き合ったか、（3）大学への要望・後輩へのメッセージの3点を中心に整理する。

コロナ禍での工夫･新たな活動

中村さん（「コロナ禍の留学・国際交流関係」に登壇）は、フィリピン・セブ島での語学研修中に新型コロナウイルス感染症が広がり、緊急帰国を余儀なくされた。その後は、情勢を踏まえて国内での活動となった。その中で、中村さんは西オーストラリア大学の学生と共同でオンラインゼミを立ち上げ、国内でも可能な範囲で学習や交流を続けた。

また、阪上さん（「大学院生の研究活動」に登壇）は、社会人として活躍する中で予てから大学院への進学を勧められていたが、業務との兼ね合いで実現していなかった。しかし、コロナ禍の影響で、遠隔授業が中心となった状況を踏まえ「これなら自宅・会社でもある程度は受講ができる」と入学を決意したとのことであった。

コロナ禍では、遠隔授業や遠隔でのコミュニケーションを支える「ツール」や「遠隔授業」そのものが当たり前となった。これらのツールや制度をうまく活用し新たな活動にチャンレンジしたことが報告された。

他にも「就職活動を終えて」の回では、遠隔面接について「画面の前にメモを用意できたのでむしろ余裕ができた（堤さん）」や「面接員に顔がはっきり映るからこそ画面映りがよくなるような工夫をした（米倉さん）」といった工夫の声が上がった。このように、コロナ禍の遠隔面接という初めての状況でも、それぞれ工夫しながら、また、その状況を逆手に取って活動を行ったことが報告された。

コロナ禍の不安といかに向き合ったのか

ここまでは、コロナ禍での工夫やチャレンジについて整理した。一方で、当然ながらコロナ禍の不安も語られた。鮫島さん（「コロナ禍のインターンシップ･実習」に登壇）からは、実際の病院での実習時間が限定されたことの不安、谷川さん・小山さん（「コロナ禍のインターンシップ・実習」に登壇）からは、遠隔でのインターンシップやイベント企画がそもそもできるのか？という不安の中、活動がスタートしたことなどが語られた。

しかしながら、不安なまま活動し続けたわけではなく、鮫島さんからは、実習の時間が限られたからこそ、大学での授業でのケーススタディなど、担当教員ができるだけ不安を解消してくれるように取り組んだことなど、授業や教員に対するポジティブなコメントが挙がった。谷川さん・小山さんも、実際のお客さんを迎えたオンラインイベントを開催し、後輩に絶対にインターンシップに行ってほしいと語るほど達成感を得ていた。

不安な中でも、前向きに活動した学生の貴重な経験を伺うことができた。一教員としては、学生の前向きな活動に安堵した面もある。しかしながら、これらの報告は大学として丁寧な支援を怠ってはいけないということの裏返しでもあると言える。コロナ禍の2年間で、大学として「できた支援」「できなかった支援」を整理し、今後の授業デザインや支援を検討していく必要があるだろう。

大学への要望・後輩へのメッセージ

学生への支援に関しては主に「1年次をほぼ遠隔授業で過ごした学生が2年生になって」と「入学前の1年間がコロナ禍だった学生が鹿児島大学に来て」の回で話を伺った。

仲塚さん・山中さんからは「履修登録、教室の場所など細かいところで分からないことが多かった」という声が挙がった。このような状況であったにも関わらず友人や相談できる相手がいなかったことで「気軽なこと、簡単なことでもすぐに相談相手や窓口がいると良かった」「先輩後輩・友人の繋がりがもっとあると良かった」といった学生目線での支援の必要性も語られた。

榎元さん・嘉村さんからは「学園祭などの大学のイベント、サークル活動を徐々に増やしたり、元に戻したりして欲しい」などの学生生活面での要望も挙げられた。学園祭やサークル活動は、学生時代にしかできない活動でもある。こういった活動を、今後いかに担保するのか検討していく必要があるだろう。

最後に後輩へのメッセージとして「趣味を持って気分転換をしっかりすること（加藤さん）」、「大学のパンフレットをよく読んで検討して欲しい（榎元さん）」など様々なコメントが挙がった。

今回のセミナーは全6回でのべ14名の学生が登壇した。大学の教職員にとっても、学生の活動や思いを知る貴重な機会となった。しかし私達教職員は「知れて良かった」で終わることなく、学生から挙がった要望や支援が必要な点などの声を受け止め、改善していく必要がある。

登壇した学生は、全員が前向きかつ積極的に学習や大学生活に取り組んでいた。一方で、困難を抱えたまま過ごしている学生がいることも事実である。今回、取りあげることができなかった声があることも踏まえて、幅広く丁寧に学生支援の方法やあり方を検討していくべきだろう。

最後に、登壇していただいた学生のみなさん、インタビュアーを務めた日髙先生、登壇した学生の推薦をして頂いた、淺田隼平先生、金子満先生、田中一枝先生、鳥居亨司先生、森田豊子先生に感謝の意を申し上げたい。

（文責：森　裕生）

第2回 FD・SD合同フォーラム

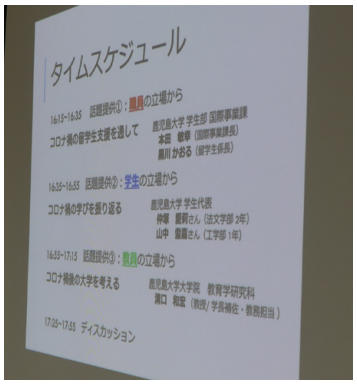
1. 概要

テーマ　全員で考えるコロナ禍を経験した未来の大学

日　時　令和3年12月10日(金)16:10～18:10

場　所　Web(Zoom)

参加者　87名



2. 目的

- 自分とは異なる立場の者がどのようにコロナ禍の遠隔授業や活動に対応したかを知り、今後の学習・教育活動や業務の改善につなげる。
- 学生、職員、教員それぞれの立場から情報提供を頂き、大学に関わる全員でコロナ禍の経験を振り返り未来の大学のあり方や必要な支援など検討する。

3. プログラム

時　間	内　容	登壇者・備考
16:10～16:15 (5分)	開会挨拶・趣旨説明	鹿児島大学総合教育機構 高等教育研究開発センター助教　森　裕生
16:15～16:35 (20分)	情報提供 ① 職員の立場から：コロナ禍の留学生の支援を通して	鹿児島大学学生部国際事業課 国際事業課長　本田　敏幸 留学生係長　黒川 かおる
16:35～16:55 (20分)	情報提供② 学生の立場から：コロナ禍の学びを振り返る	鹿児島大学法文学部　2年　仲塚　愛莉 鹿児島大学工学部　1年　山中　雪嘉
16:55～17:15 (20分)	情報提供③ 教員の立場から：コロナ禍後の大学を考える	鹿児島大学大学院 教育学研究科 教授 学長補佐（教務担当）　溝口　和宏
17:15～17:25	休憩	
17:25～18:05 (40分)	パネル・ディスカッション	話題提供を踏まえ、シンポジスト間の意見交換後、フロアからの質問を受け付けてディスカッションを実施
18:05～18:10	閉会挨拶	鹿児島大学理事（教育担当）・副学長 武隈　晃

（敬称略）

4. 実施方法

- Zoomによるリアルタイム配信

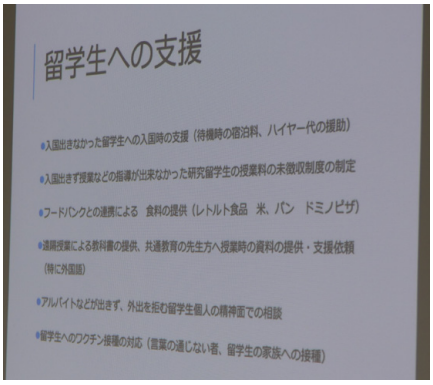
5. 実施報告

本企画は、「全員で考えるコロナ禍を経験した未来の大学」と題して実施された。2021年度は、新型コロナウイルス感染症の本格的な流行2年目であった。学生のみならず教職員も慣れが生じ、遠隔による授業や活動が日常にもなってきた。もちろん日常になったからと言って、これまでの活動ができないことによる不安やストレスを抱える学生の支援を蔑ろにすることはできない。学生の学習、生活などの支援は緩めることなく実施し続ける必要がある。

一方で、これまで非日常であった遠隔授業や遠隔での活動が日常となったことを踏まえて、新たな大学や授業などのあり方を考えることはできないだろうか。世界では、MOOCのようなWebを介した授業公開の取り組みは何年も前から行われてきた。また、ミネルバ大学のようなキャンパスを持たない大学が人気を集めており、近年は大学の「あり方」や「意味」が問われている。鹿児島の高等教育機関も「コロナ禍が落ち着けば2019年度以前に戻る」ではなく、コロナ禍の経験を活かした新たな活動や取り組みが求められるだろう。

これらの点を踏まえて、2021年度の第1回FD/SD合同フォーラムでは、学生、職員、教員の3つの立場からコロナ禍での活動・経験を共有する情報提供を行ってもらい、参加者全員でコロナ禍を経験した未来の大学のあり方を議論した。

話題提供①：職員の立場から

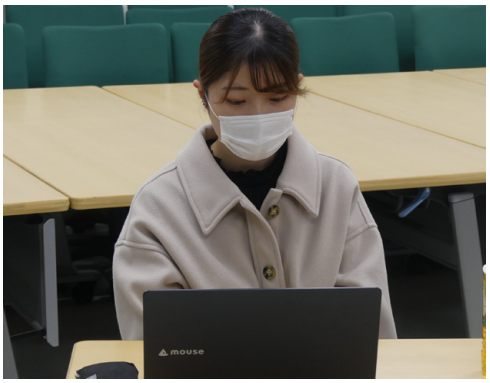


職員の立場として、鹿児島大学 国際事業課の本田課長、黒川係長から情報提供が行われた。コロナ禍における、留学生や留学を希望する学生の状況や対応について情報提供を頂いた。留学生に対しての支援として、入国できなかった学生への教科書・資料提供などの学習支援にとどまらず、フードバンクと連携した食料の支援、待機時の宿泊費用等の補助などの金銭的な支援などの幅広い支援を実施してきたことが報告された。

また、多くの留学希望の学生が叶わずにいるなどの厳しい現状も報告された。未だに海外留学は厳しい状況が続いており、いかにして海外留学の支援や似たような活動をデザインするかは大きな課題であると言える。一方で、海外の大学の授業をオンラインで受講した学生の存在や、海外の大学に所属する教員とオンラインミーティングが開催されるようになったといったコロナ禍の状況だからこそ実現した新たな取り組みも明らかになった。

鹿児島大学に留学を予定している学生や海外留学を希望する学生は、単に鹿児島大学・留学先の大学の授業を受講したり、外国語の習得ができれば良いというわけではないだろう。感染症の拡大は、学生・教職員がコントロールできることではないが、鹿児島やその地でしかできない経験や活動ができるように、状況の改善が期待される。

話題提供②:学生の立場から



学生の立場として、鹿児島大学法文学部2年の仲塚さん、鹿児島大学工学部1年の山中さんより情報提供が行われた。

仲塚さんは、大学の入試・高校の卒業式の時期などの時期に感染が拡大し、先行きが不透明な状況での入学・大学生活となった。1年次に取り組みについては、ほとんど遠隔授業で実施され、授業はもちろんのこと履修登録などの事務的な手続きについて相談できる仲間がいない中での不安についての話があった。一方で、自宅近くでアルバイトを開始したり、長期休みでボランティアに参加したりするなど、感染状況に応じて積極的に活動したことが報告された。

また、2年次は少しずつ対面授業が戻ってきたことで大学に来る機会も増え、サークルへの参加などにより友人ができたことが大きな糧になっているとのことであった。コロナ禍でも精力的に活動してきた様子が伝わってきた。最後に、これからも対面でのフィールドワークやインターンなどに積極的に参加したいという展望が語られた。

山中さんは、高校3年次から本格的な感染拡大の影響を受け、コロナ禍での受験だけでなく、共通テスト１年目という大きな変化の中での活動であった。一言で言うと「困惑」という言葉にあったように、1人で勉強してきたことや、部活や学校行事の中止・縮小など、先が不透明な中での進学となった。入学後は、前年度よりは対面授業が増えていたものの、仲塚さん同様に友人が作りにくいことの悩みなどが報告された。建築学科所属ということもあり、終息後は世界の建築物を見に行きたいという思いが語られた。

両名に共通するキーワードとして「友人や仲間の存在」が挙げられる。徐々に対面授業が増えているものの、サークル活動が十分に行えないなど未だに制約は多い。大学での友人関係は、学び合う仲間でもあり、卒業後も支えあうような仲間でもある。学習の支援は当然必要であるが、学生間の交流の機会や先輩・後輩の繋がりを担保することなどが、今後重要になると考えられる。

話題提供③：教員の立場から

教員の立場として、鹿児島大学 教育学研究科所属で、学長補佐（教務担当）の溝口先生より情報提供を頂いた。まず、鹿児島大学全体での遠隔授業・対面授業の割合などのデータをベースに2年間の授業形態の変遷の説明があった。学生からの報告にもあったとおり、2021年度は、対面授業が前年比で倍増するなど徐々に改善しつつある状況が報告された。

また、Zoom（リアルタイム）、manaba・YouTube（オンデマンド）を組み合わせた授業事例の紹介も行われた。教育学部での模擬授業と授業検討会を行う授業を対象に、模擬授業を録画してオンデマンド配信し、授業検討会をリアルタイム配信する方式の授業である。

このような録画やオンデマンド公開のテクノロジーや、反転授業と呼ばれる方式は決して最新の事例というわけではない。一方で、コロナ禍の経験によりツールやテクノロジーの活用が日常になった。冒頭でも述べた通り、教員も学生も遠隔授業で培った知見や活動に対する慣れはコロナ禍の終息後にも活かせる視点ではないかと思われる。

これより「講義室は必要か？」「授業は遠隔か？対面か？ハイブリッドか？」「学びの質をどう保証するか？」といったパネル・ディスカッションへの論点が示された。パネル・ディスカッションでは、溝口先生より提示された論点や会場からの質問を中心に進められた。質問の多くは学生の2名向けであり、コロナ禍での学生の声を聞くことへの関心の高さが伺われた。

昨年度の本フォーラムも同様の形式で実施し、学生・職員・教員の立場から情報提供を受けた。昨年度は、いずれの立場それぞれの困難が生じ、その中にはすでに解決できたものもあればいまだ解決できないものもあり、試行錯誤しながらの活動となったことが報告された。一方で今年度は、本田課長から報告されたような「海外からの遠隔会議参加」が実現するなどの「新たな展開・活動」も報告された。

仲塚さん・山中さんは質疑応答で「遠隔授業と対面授業が選べるならどちらを選ぶか？」という問いに対して両名ともに「対面」を選択すると回答した。これは「鹿児島に高等教育機関がある意味」を学生・職員・教員の全員が改めて一度振り返ることの重要性を示していると言える。その振り返りを通して、鹿児島で学ぶ学生に寄り添った授業や活動、支援をしていく必要があるだろう。

（文責：森　裕生）

若手教員研修会

1. 概要

テーマ　学習者中心の学習環境デザインを考える

日　時　令和4年2月18日(金)13:00～15:00

場　所　Zoomを用いた遠隔リアルタイム配信ののちオンデマンド配信

参加者　リアルタイム配信:15名、オンデマンド配信:のべ19名

2. 目的

本年度の若手教員研修会の目的は「学習者中心の学習環境」をキーワードとし授業デザインについて検討することである。

高度な専門性の育成を大きなミッションとする大学教育においては、知識内容としての重要性が先行する形で授業デザインが行われる場合が少なくない。近年は、達成すべき学習目標を踏まえた授業設計の重要性に対する理解が徐々に高まっているものの、教員の間に十分浸透しているとは言い難い状況がある。

そして、いま一つ注意しなければならないのが、学習者中心の学習環境デザインである。高度な専門性を有する教員の側からすれば早期に理解・修得すべき内容であっても、学習の全体像が把握できていない学習者にはその意図がわからず、十分な理解に至らない場合があり得る。また、学習者の既存知識に基づいて授業内容を変更したり、興味関心を考慮しながら学習の順序を検討したりするといった配慮も、より高い学習成果を挙げるには重要である。

こうした点を踏まえ、前半は学習者中心の学習環境デザインについての解説や事例紹介を実施し、後半は自身の授業設計及び授業そのものの改善につながるワークを実施した。

3. 前半：話題提供

前半は、前半は学習者中心の学習環境デザインについての解説や事例紹介を実施された。話題提供者やタイトルは以下の通りである。

内　容	担当・概要
話題提供①:遠隔授業でのグループワークのデザイン	清水 佐智子 先生(医学部保健学科)
話題提供②:学生のモチベーションを考えた英語授業の実践	日髙 佑郁 先生(共通教育センター)
学習者中心の学習環境デザインとは？	森 裕生(高等教育研究開発センター)
質疑応答	

話題提供を頂いた清水佐智子先生（医学部・保健学科）と日髙佑郁先生（共通教育センター）は、2021年度・前期の遠隔授業アンケートにおいて「良かった授業」として学生から多くの名前が挙げられた教員である。それぞれの話題提供の概要は以下の通りである。

清水佐智子先生「遠隔授業でのグループワークのデザイン」

まず、清水先生の授業に対して遠隔授業アンケートで学生から挙げられた点は以下のとおりである。

- 事例を用いたグループワークを積極的に取り入れてくれて、実習などでとても活かされた
- 3人ほどでのグループセッションを毎回取り入れていて、積極的に取り組まざるを得ない授業内容にしてあり、活発で充実した授業内容であったと感じた。
- 毎時間グループワークがあって楽しみながら学ぶことができた。
- グループワークがたくさんあり、遠隔授業でありながら様々な人との交流ができたから。
- グループワークが充実していた
- 遠隔ではあったが、グループ活動が多く、積極的に取り組めた。
- グループワークを積極的に用いてくださった点。また、ビデオを付けることを強制しなかったため、とてもやりやすかった。
- グループワークが活発になされ人の意見を聞くことができ、学びが深まり、有意義だった。
- 知識の伝達だけでなく、ケーススタディや事前学習などを通し、考えさせるような授業だったので良かったと感じた。加えて、単純に興味のある分野だった。

（2021年度前期・遠隔授業アンケートより）

図１：清水先生の講演スライド

このように学生からは「グループワーク」に関する項目が非常に多く挙げられた。これを踏まえて、清水先生からは「遠隔授業でのグループワークのデザイン」をテーマに情報提供が行われた（図１）。

話題提供では、遠隔授業の特徴を踏まえ、カメラ映像が綺麗に映るようにする、学生が困ったときにいつでも連絡できる窓口を用意するなどの配慮が紹介された。

また遠隔・対面に関わらず重要な授業デザインとして「学生が少しジャンプすれば届くテーマ設定」が紹介された。教員はその分野の専門家であるため、扱うコンテンツやその学術的位置づけがはっきりと構造化されている。しかしながら学生は、これから学びを深める立場であるため、それらがはっきりと見えていたり、認識したりして

いるわけではない。こういった学生の特徴を踏まえ、学生が混乱することなく、課題設定や情報提供をすることの重要性が解説された。

他にも、グループワーク後の学生の発表内容にはポジティブフィードバックを返すなどの、学生の興味関心を高めることができるようなデザインが紹介された。ポジティブフィードバックについては、参加の先生の多くが共感しており「具体的にどのような声掛けを行っているのか？」といった質問が上がるなど活発な議論がなされた。

日髙佑郁先生「学生のモチベーションを考えた英語授業の実践」

日髙先生の授業に対して遠隔授業アンケートで学生から挙げられた点は以下のとおりである。

- 遠隔だったがグループワークが多かった点
- zoomを用いてグループ活動できた点。
- 他の講義に比べ、声が聞き取りやすかった。
- グループに分かれて話し合う時間があった。
- 教科書の内容だけではなく、他の教材を使って学習することで、理解を深めることができた。
- 毎時間先生が授業を盛り上げてくれたので、元気をもらえて楽しく授業を受けられた。
- 一人に発表させるのではなく、みんなで声を出して英語の発音練習や要約の練習をするよう促していたので緊張せず気楽に練習できた。
- 授業の進め方や流れに大きな変更がなく、決まっていたのでやりやすかった。
- 解説がわかりやすかった。
- 授業が楽しかった。
- 遠隔授業でありながらも、対面同様に話し合いをしたり、動画を見たりすることができる点。
- 遠隔授業でも、生徒同士でコミュニケーションをとる機会を多く作ってくださった点。

（2021年度前期・遠隔授業アンケートより）

学生からの「楽しかった」「緊張せずに」といったキーワードに代表されるように、学生のモチベーションの向上や雰囲気作りに関する項目が挙げられた。これを踏まえて、日髙先生からは「学生のモチベーションを考えた英語授業の実践」をテーマに情報提供が行われた（図2）

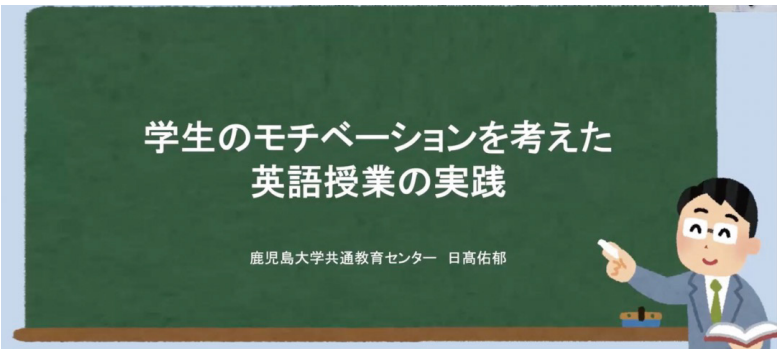


図２：日髙先生の講演スライド

情報提供では、鹿児島大学の学生が英語を学ぶモチベーションとして、入試英語の学習が主だったことを踏まえ「英語を読むことに飽きている」「英語学習の到達目標が不明瞭」「英語で話すことの苦手意識」などが挙げられた。これらの問題意識を踏まえて、授業の様子や工夫点などが紹介された。

具体的には「外国語を継続的に学ぶための方略を学ぶ」といった英語の知識にとどまらず語学学習全般と関連付けた目標が設定されていることなどが説明された。例えばリーディングの授業では、学生は受験英語により「回答を書く」ことに慣れているため、回答を書いた後にその英文の内容を忘れてしまう。一方で、英語（語学）を学ぶということは、その文章に何が書かれていて、それを自身がどう解釈したのか？といったことを説明できるようになることが重要である。これを踏まえ、英文のまとめを書く若干負荷の高い予習を課しているということであった。さらに、そのまとめを活用して、学生間の相互説明をする授業デザインについて説明があった。

さらに、学生間での発表時の負担感を減らすために、練習の機会を設けたり、ポジティブフィードバックで学生を褒めたり、先生自身の趣味や失敗談を話しながら「間違っても良いんだ！」「この先生なら何を話しても拾ってくれるな！」という雰囲気作りを重視しているという話が挙げられた。

森裕生「学習環境中心の学習環境デザインとは？」

清水先生、日髙先生の講演を受けて、筆者より「学習者中心の学習環境デザイン」の解説を行った（図３）。清水先生の話題提供にあった「少しジャンプすると届くテーマの設定」は、学生の現状の分析、先輩の取り組みの分析の上に成り立つことや、日髙先生の授業デザインは、学生の「英語学習のモチベーション」を分析された上に成り立つ授業であるなどの解説を行った。このように、学習者中心の学習環境デザインの概要だけでなく、話題提供を頂いた２名の先生の授業デザインに学習者中心の考え方がどのように反映されているかを説明した。

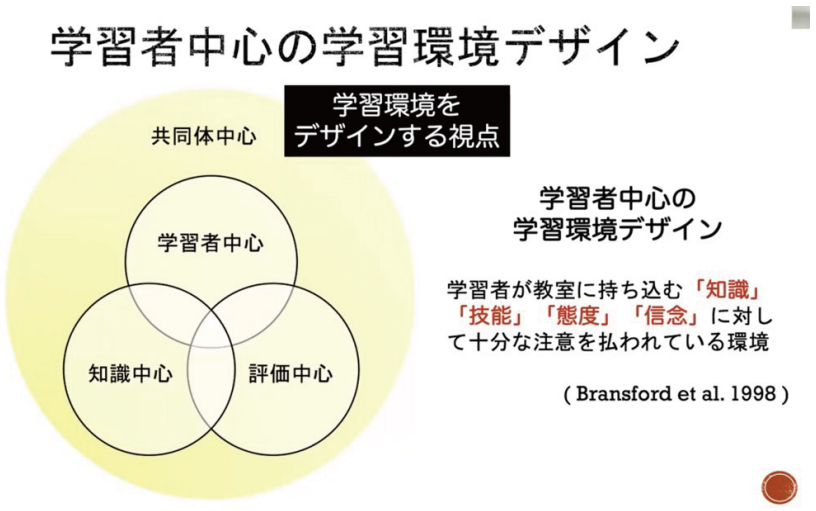


図３：講演スライド

4. 後半：授業デザインの振り返りワーク

前半は、前半は学習者中心の学習環境デザインについての解説や事例紹介を実施された。話題提供者やタイトルは以下の通りである。

①到達目標・こうなって欲しい学生像（図４・茶）

まず、振り返る授業を１つ選び、その授業の到達目標や受講を通して学生に「こうなって欲しい」という点を整理した。ここでは、シラバスに書く到達目標とは異なり、「先生自身の言葉」や「思い」を記述してもらうように説明した。これにより、授業でやるべきことや、授業に望む教員のモチベーションなどを改めて振り返ることを促した。

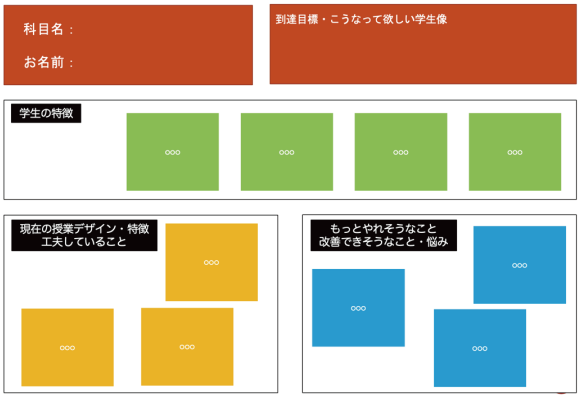


図４：ワークのフォーマット

②学生の特徴（図４・緑）

次に、選んだ授業の受講生について、学生の意欲や既有知識などを整理した。これは、本研修のテーマである「学習者中心の学習環境デザイン」を踏まえて行われた。

③現在の授業デザイン・特徴、工夫していること（図４・黄）

②を踏まえて、学生の特徴に合わせてどのように授業をデザインしているか、自身が工夫していることを整理した。これは、④の「もっとやれそうなこと」「改善点」を検討する足場として実施した。

④もっとやれそうなこと・改善できそうなこと・悩み（図４・青）

最後に、これまでのワークを踏まえて、来年度以降の授業デザインでもっとやれそうなことや改善点などを整理した。これ際して、前半で扱われた清水先生、日髙先生のコピーではなく参加の先生自身が「無理なく」取り組めることを整理するように説明した。

これは教員自身の強みや得意なことを活かした授業デザインにつなげるためである。また、記述する内容は、抽象的でも具体的でも良いとした。抽象的な内容は、授業デザインの「指針」として働き、具体的なことは、すぐに実践できる「方法」であると説明し、参加の先生の授業の振り返りや翌年度以降のデザインの再考を促した。

以上のワークを通して、最後に参加の先生間での意見交換が行われた。活発な意見交換が行われ「年に一回ではなく各学期に開催したほうが良い」、「若手に限らず全教員が参加したほうが良い」といった意見が挙がった。

このような意見にもある通り、教員の振り返りは大学教育では必須とも言える活動になっている。それを踏まえ、本研究会のあり方を総合的に検討する必要があると言える。来年度以降は、新たな形で実施できるように検討を進めたい。

（文責：森 裕生）

鹿大版FDガイド第24･25号の発刊にあたって

1. 概要

本年度は、FDガイドを2号発刊した。昨年度に引き続き、前年度の鹿児島大学ベストティーチャー賞最優秀賞受賞者である3名の教員に執筆を依頼した。

2. 第24号「ベストティーチャーに聴く授業の工夫⑤」

第24号は酒井佑輔教授（法文学部）と北原兼文教授（農学部）にそれぞれ執筆いただいた。

酒井先生はアイスブレイクやグループワークを活かした授業運営を行っており、反転授業についても積極的に取り入れている。授業時間については、学生が教員の話を聴くというより学生自身が何らかの学習活動に主体的に取り組むことを重視しており、比較的新しいスタイルの授業運営に取り組んでいるといえる。

これに対して北原先生は、パワーポイントの映写や配布資料のほか、ホワイトボードでの板書も行うなど、オーソドックスな講義型授業を基盤としつつ、スマートフォンで使えるwebアプリを活用したり、演習問題の解答解釈をクラス全体で行ったりするなどして学生を学習に巻き込む工夫を積極的に行っている。

酒井先生と北原先生の授業運営方法は一見すると全く異なるように思われる。しかし、学生を主体的な学びに導くために様々な工夫を行っているという点で共通している。授業にはそれぞれの目的･目標があり、ある運営方法が全ての授業に適しているわけではない。その意味で、この第24号は性質の異なる「良い授業」のあり方が提示されており、読者の状況に応じた知見が得られるものとなった。

FDガイド第24号（表）

FDガイド第24号（裏）

3. 第25号「ベストティーチャーに聴く授業の工夫⑥」

第25号は、杉原剛教授（大学院医歯学総合研究科（歯学系））に執筆いただいた。

杉浦先生は、自身が学生だった時の経験を踏まえ、基礎系と臨床系の内容が学生の中でつながり、双方の知識を統合してその後の学び、さらには歯科医療の現場で活かされることを意図した授業運営を行っている。また、患者の協力を得て生の声から学生自ら考える機会を設ける取り組みも行っている。いずれも医療分野ならではの有意義な取り組みであり、かかる負荷を考えても他分野の授業で取り入れるのは容易でない。しかし、育成すべき人材像を踏まえてどのような学習機会を教員は提供すべきか、という視点に立った場合、注目に値するものである。

一方、通常の講義型授業でも工夫がなされている。特にプレテストの実施については、学生があらかじめ集中して学ぶべきポイントを理解して授業に臨めるという効果があり、他の授業においても取り入れることが可能である。ポストテストとセットで実施することによって授業理解度を測定することも可能であり、知識の習得を目指す授業において非常に有効だといえる。

FDガイド第25号（表）

FDガイド第25号（裏）

（文責：伊藤 奈賀子）

2021年度大学IRコンソーシアムアンケート

実施期間 2021年10月18日～12月24日

対 象 者 2020年度学部1年生および3年生（過年度生は除く）

実施方法 manabaを活用したWebアンケート

回答者数 1年生1,284名、3年生817名

1.実施目的

大学IRコンソーシアムアンケートとは、一般社団法人大学IRコンソーシアムが学生の学習習慣や学習成果を把握することを目的として設計した学生調査である。本学は同コンソーシアムに加盟した2012年以降、全学部の1年生および3年生を対象に毎年秋に実施し、学生の学習状況に関わるデータを収集している。そして、コンソーシアムに加盟する他大学のデータとの比較を通して、本学学生の学びの実態を分析し、全学的な教育改善につなげている。

2021年度は、前年度に引き続き、manabaを活用したWebアンケートによる全数調査を実施した。

2.実施概要

（1）調査対象者

2021年度学部1年生および3年生（過年度生は除く）

（2）調査の実施方法

manabaを活用したWebアンケート

（3）調査項目及び回答所要時間

主な調査項目は次の通りである。回答所要時間は、1年生及び3年生いずれも約15分であった。アンケートは前半と後半の２つに分けて提示され、実施された。

対象者	1年生	3年生
調査項目	● 学籍番号、プロフィール ● 授業経験、学習行動、受講態度 ● 正課内外の活動時間 ● 知識、能力の獲得状況 ● 英語運用能力のレベル ● 大学生活、大学教育に対する満足感 ● 将来イメージ ● 高校時代の学習経験	● 学籍番号、プロフィール ● 授業経験、学習行動、受講態度 ● 正課内外の活動時間 ● 知識、能力の獲得状況 ● 英語運用能力のレベル ● 大学生活、大学教育に対する満足感 ● 将来イメージ ● 在学中に経験したいこと
回答所要時間	約15分	約15分

3.回答率

1年生のアンケート回答者数は1,284名、３年生のアンケート回答者数は817名で、回答率はそれぞれ67.1%と43.6%であった（アンケート前半と後半のいずれかのみの回答者を含む）。学部別の回答者数および回答率は次の通りである。

	1年生			3年生		
	調査対象数	回答者数	回答率	調査対象数	回答者数	回答率
法文学部	414	305	73.7%	429	109	25.4%
教育学部	191	128	67.0%	217	79	36.4%
理学部	193	111	57.5%	182	96	52.7%
医学部医学科	110	65	59.1%	100	69	69.0%
医学部保健学科	120	108	90.0%	120	88	73.3%
歯学部	53	47	88.7%	47	27	57.4%
工学部	446	297	66.6%	385	194	50.4%
農学部	212	120	56.6%	217	106	48.8%
水産学部	144	84	58.3%	148	40	27.0%
共同獣医学部	31	19	61.3%	30	9	30.3%
合計	1,914	1,284	67.1%	1,875	817	43.6%

※回答者数および回答率は、アンケート前半と後半のいずれかのみの回答者を含む

4.回答結果について

本アンケートの回答結果については、令和４年４月の全学FD委員会にて本学の回答データのみ報告が行われた。大学IRコンソーシアム全会員校の回答結果については毎年秋頃に公開されており、本年度についても他大学の回答データが公開され次第、他大学との比較に基づく本学学生の特徴分析が進められ、同委員会にて改めて報告が行われる予定である。

令和2年度 鹿児島大学ベストティーチャー賞

1.はじめに

鹿児島大学ベストティーチャー賞は、平成30年度より選考・表彰が開始された。令和２年度の選考・表彰についてここに報告する。

2.選考方法及び表彰された教員

選考については、本学の学部・研究科及び総合教育機構において、授業を担当する常勤教員の中から各1名、計12名がまず選出された。その後、学長・教育担当理事及び学長が指名する理事からなる選考委員会において、この12名の中から3名の「ベストティーチャー賞最優秀賞」受賞者を決定した。また、その他の教員の中から、今回は9名を「ベストティーチャー賞」受賞者に決定した。

受賞者については、以下の通りである（敬称略）。なお、これらの教員のコメントについては、大学公式サイトにおいて公開されている（https://www.kagoshima-u.ac.jp/education/bt-r2.html）。

ベストティーチャー賞最優秀賞	酒井　佑輔	法文学部
	杉原　剛	大学院医学総合研究科（歯学系）
	北原　兼文	農学部
ベストティーチャー賞	中島　友樹	教育学部
	加藤　太一郎	大学院理工学研究科（理学系）
	奥野　浩行	大学院医歯学総合研究科（医学系）
	松成　裕子	医学部
	木村　至伸	大学院理工学研究科（工学系）
	五島　崇	大学院理工学研究科（工学系）
	内匠　正太	水産学部
	白石　光也	共同獣医学部
	トレマーコ・ジョン	総合教育機構

3.ベストティーチャー賞最優秀賞受賞者の活動

ベストティーチャー賞最優秀賞を受賞した3名の教員は、いずれも今年度発行した鹿大版FDガイド第24号及び第25号の執筆を行った。内容については、本報告書pp.18-19を参照されたい。一方、例年行われているオープンキャンパスにおいての模擬授業はコロナ禍を受け中止となった。

4.その後の規則改正

今回のベストティーチャー賞選考委員会においても、委員よりいくつかの指摘や提言が行われた。これを受け、令和3年度以降の選考においては、教育活動を複数の教員によるチームで実施する授業形態の状況を踏まえ、チームでの推薦ができるよう規則の改正を行った。これらを踏まえて今後手続きが進められる。

（文責：伊藤 奈賀子）

Ⅲ

鹿児島大学のFD活動

第2部

各学部・研究科のFD活動報告